

## メッセージアウトライン 創世記12:1～9「アブラムの出発」

[1-3]「主はアブラムに言われた。『あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。』」

アブラムはどのようにして主なる神の語りかけを聞いたのだろうか。この時はまだ旧約聖書も新約聖書もない時なので、たぶんノアの時のように直接神の語りかけが彼にあったと思われる。→6:13,7:1,8:15,9:1 アブラムは父テラと親族とともに偶像礼拝に満ちたカルデアのウルを出てユーフラテス川沿いに約千km北上し、この時はハランの地に住んでいた。もともと父テラはカナンへ行く予定であったが、なぜかハランの地に定住することとなった。→11:31 ハランは先にカルデアのウルで死んだ自分の息子ハランが開拓し、その名にちなんで名付けた町であった可能性があるため、親しみがあつたのかもしれない。→11:28

主なる神がアブラムに語られたことばには三つのポイントがある。

①「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい」

ここでは信仰の従順が求められている。

②「そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい」

信仰を持って神のことばに従う時、彼は神に祝福され、大いなる国民となり祝福の源となる。神の救いの御計画の中で、彼の占める位置は大きい。しかし、これもあくまでも神の一方的な選びのゆえである。彼自身が神の前に特別に立派で優れていたからではない。→ローマ4:2~3、マタイ3:9、ルカ3:8

③「わたしはあなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族はあなたによって祝福される」

アブラムは神の選びの器とされたがゆえに、彼を祝福する者は祝福され、彼を呪う者はのろわれる。これは神の約束である。さらに、地のすべての部族はあなたによって祝福されるとの約束はアブラムの存命中に果たされるものではなく、やがて彼の子孫として来られるイエス・キリストによって実現することとなる。

[4]「アブラムは、主が告げられたとおりに出て行った。ロトも彼と一緒にであった。ハランを出たとき、アブラムは七十五歳であった」

神の語りかけに対するアブラムの応答は単純率直であった。彼は神のことばを信じて行動に移した。それは軽はずみなことであつたであろうか。そうではない。実際、彼の前にはさまざまな困難があつた。

①住み慣れた地を離れ、親族と別れて出て行かなければならない。

②行き先が不明である。③彼は七十五歳という高齢であった。

しかし、こうした現実にも関わらず、彼は直ちに神のことばに従った。ここに彼の信仰をはっきり見ることができる。それは目をつぶって断崖絶壁から飛び降りるというような信仰ではなく、彼のために祝福を、最善を与えられるという神を信じ、信頼するがゆえの信仰であり、行動であった。

11:32によれば、アブラムの父テラの生涯は二百五歳であり、11:26では彼が七十歳のときにアブラムとナホルとハランを生んだとある。するとテラの死亡時にはテラの長男は $205 - 70 = 135$ 歳となっているはずである。アブラムが長男であり父テラが七十歳の時に生まれたとすればアブラムが父の家を出たとき七十五歳であるので、テラは $70 + 75 = 145$ 歳でまだ生きていたことになる。このようなことから考えると、アブラムはまだ父が存命中に神の呼びかけに答えて父の家を出たと思われる。そうするとこれはますます大きな信仰の決断であったということがわかる。アブラムは甥のロトと一緒に出たので、後には父テラと兄弟ナホルの家族だけとなる。彼は父と親族をあとに残して神に従って出発したのである。

[5]「アブラムは、妻のサライと甥のロト、また自分たちが蓄えたすべての財産と、ハランで得た人たちを伴って、カナンの地に向かって出発した。こうして彼らはカナン地に入った」

アブラムはすべてを伴って出発した。再び帰ることのない故郷の地との決別である。カナン地はハランから西南へ約800kmの地である。なぜ彼はカナン地に向かったのか。それはもともと彼の父テラが偶像礼拝に満ちたカルデアのウルからカナン地へ行くとしていたが途中でハランに住むようになったことと関係があるかもしれない。→11:31 もちろんそこにも神の導きがあったであろう。

[6-7]「アブラムはその地を通して、シェケムの場所、モレの榿の木のところまで行った。当時、その地にはカナン人がいた。主はアブラムに現れて言われた。『わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。』アブラムは、自分に現れてくださった主のために、そこに祭壇を築いた」

シェケムはエルサレムの北約50kmの地。彼らはカナン地の中中部まで来ている。ここにはハムの子孫であるカナン人が住んでいた。「モレの榿の木」…「モレ」とは占うもの、導くものという意味であり、それゆえここはカナン地の土着の宗教のひとつの拠点であったのかもしれない。ここで主はアブラムに現れて、彼の子孫にこの地を与えると言われた。これは主が夢で現れたのか、幻のような形であったのかどのような現れであったのかはわからない。しかしそこで彼は主の約束の真実さを味わったことであろう。「わたしが示す地」(12:1)とはこのカナン地であったのである。彼は自分に現れてくださった主のために、そこに祭壇を築いた。カナン地の土着宗教の根拠地でアブラムは主のために祭壇を築き、礼拝をしたのである。祭壇を築き礼拝をするという行為はこれ以後、彼が行く所どこでも異教の宗教に飲み込まれず、主なる神に対する信仰を貫き通すということの大切な証しとして行うこととなる。

[8-9]「彼は、そこからベテルの東にある山の方へ移動して、天幕を張った。西にはベテル、東にはアイがあった。彼は、そこに主のための祭壇を築き、主の御名を呼び求めた。アブラムはなおも進んで、ネゲブの方へと旅を続けた」

アブラムの一行はカナンの地をさらに南下した。「ベテル」や「アイ」はエルサレムから約20km北の地。ここは南北と東西に走る幹線道路の交差点に位置していた。それゆえ彼らはシェケムからごく自然にこの地へ移動してきたのであろう。彼は生活のために天幕を張るだけでなく、神を礼拝するために祭壇も築いた。「主の御名を呼び求めた」これはここまで主が導き、守り、祝福してくださったことの感謝とこれからの導きのためであったであろう。祭壇を築くのは犠牲の動物をささげ礼拝するためであるが、主の御名を呼び求める、すなわち願い、とりなし、感謝をもって祈ることは礼拝の重要な要素である。「ネゲブ」ここは現在の死海の南部に広がる乾燥した地帯。アブラムの一行は羊や牛などの家畜を放牧しながらそこまで下って行った。カナンの地はこのあたりが南の限界である。少し南へ行きすぎではないかと思うが、生活するのに最適な場所を探しながら旅を続けていくうちにそこまで下って行ったのであろう。

アブラムは七十五歳の時に神の約束、神のみことばを信じて、父の家を出て神を信頼しつつ行き先を知らずに出て行った。一見無謀とも思えるこのアブラムの決断、出発を神は祝してくださり、彼の子孫にカナンの地を与えるとの約束を与えられた。彼の信仰の歩みはこれからも続くが、彼は行く先々で祭壇を築き、主なる神を礼拝することを第一とした。これこそが彼の信仰の姿勢であった。私たちもアブラムの姿にならい、主のみことばの約束をしっかりと握り、祝福への道を進んでいかなければならない。